がん患者の遺伝子情報活用

医療機関連携し治療

別府で実証実験

別府市医師会と九州大学病院別府病院、ヤフージャパン（東京）は、がん患者の遺伝子情報を活用して、患者の治療から日常生活まで継続的に医療支援するシステムを構築し、6日、都内で記者会見をした。遺伝子検査を取り入れた先進的な試みで、最適な治療や生活支援で医療費や介護費を抑える効果が期待される。

同別府病院と市内13の民間病院が「別府市スマートライフシティ計画」として6月から実証実験を始めた。計画が示した医療支援によると、がん治療は医療機器やスタッフがそろった基幹病院で手術などの高度な医療を施し、退院後の日常管理は地域のかかりつけ病院が担う。この際、遺伝子のデータを有効に使う。

具体的には、がん細胞そのものの遺伝子と患者の唾液から採取した遺伝子の2種類を分析。それに基づき、基幹病院は最適な治療計画を、地域の病院は患者ごとの生活習慣病や薬の耐性など健康上のリスク管理をして日常生活を含めて医療支援する。データの共有により、患者は生活の質を改善し健康寿命を延ばせる。

重要な個人情報を取り扱うため、情報管理をヤフージャパンに、唾液分析は遺伝子検査サービスを手掛ける「ジーンクエスト」（東京）にそれぞれ委託する。

会見で矢田公裕別府市医師会長は「がん治療だけでなく生活習慣病予防などにも役立てたい」、三森功士九大病院別府病院副病院長は「温泉保養地として全国の先駆けとなる健康増進モデルをつくりたい」と抱負を語った。今後、連携する病院を増やしていく。

手術と薬物療法、放射線治療を効果的に組み合わせるがん治療は効果を上げ、社会復帰するがん患者も増えている。再発や合併症リスクといった課題解決にも有効な手段となりそうだ。

（小田原大周、吉良政宣）

説明をする三森功士・九大病院別府病院副病院長（中央）と矢田公裕・別府市医師会長（右）ら

メモ

がんは細胞分裂の際に間違った（変異した）遺伝情報をコピーすることで発症し、発症部位などによって変異遺伝子に特徴があるとされる。特徴ごとに効果の高い薬を使い分けて副作用を最小限に抑える研究が進み、遺伝子検査データが欠かせない。唾液から採取した遺伝子情報も組み合わせてより効果的な医療を目指す。

別府市スマートライフシティ計画

c大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。